

## 市民参画型の模擬患者養成プログラムの開発 —共に育み合う市民主体の学習の場づくりを目指して—

原 井 美 佳   上 村 浩 太   坂 東 奈穂美   貝 谷 敏 子  
御 厩 美登里   樋之津 淳 子   河原田 まり子

札幌市立大学看護学部

抄録：本研究は模擬患者 (Simulated Patient 以下 SP) の能力を最大限生かす場を設定し、共に成長し合う学習の場を創り出す SP 養成プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とするアクションリサーチである。SP 養成プログラムの作成においては、本学の過去の SP 養成プログラム、ならびに他大学や SP 自主組織のプログラムについて分析のうえ作成した。プログラムは、各回のテーマ、学習内容、学習方法、使用教材、場の設定、担当者と役割を設定し、全 10 回の研修を計画し実施した。この際、現 SP には、そのスキルを十分に発揮できるよう負担を考慮しつつ役割を分担した。対象者は、現 SP 19 名であり、質問紙調査とインタビュー調査によりデータを収集した。質問紙調査の結果から、SP 養成講座へ参加したことによる SP 活動に対する思いと満足感の変化について検討した。また、インタビュー調査の結果から、【今後の安心感につながった】【今後の会の運営について考える機会となった】と未来への思いが生じ、【メンバー同士が話し合う機会が増えた】と会員同士のつながりに変化がみられ、【新たなメンバーとの人間関係の調整を学んだ】【活性化のよい機会となった】などの挑戦の機会となったことが明らかとなった。さらに、【SP として省察の機会となった】【教員を客観的にみる機会となった】と振り返り、【SP 活動の支え合いと学び合いを実感した】と意味を見出していた。本研究ではこのように、共に成長し合う市民参画型の SP 養成プログラムを開発し、その効果を検証した。

キーワード：市民参画型、模擬患者養成プログラム

### Development of a Public Participatory Simulated Patient Training Program for the Creation of a Citizen-Centered Learning Venue for Mutual Development

Mika Harai, Kouta Uemura, Naomi Bando, Toshiko Kaitani,  
Midori Mimaya, Atsuko Hinotsu, Mariko Kawaharada

School of Nursing, Sapporo City University

**Abstract:** In this study, we developed a simulated patient (SP) training program designed to maximally utilize the skills of SPs and to provide a venue where SPs could learn from each other. An action research was conducted to verify the effectiveness of this program. To create the SP training program, we first analyzed past SP training programs at this university, programs run by other universities, and programs run by SPs themselves. In our program, we established the topics for each session, the academic contents, the learning methods, the educational materials, the locations and healthcare settings, and the roles of supervisors. The program was planned as a seminar with a total of 10 sessions. We assigned roles to the current SPs so that their skills could be fully utilized while also considering the burden these roles placed on each SP. The participants of the study were 19 current SPs. The

data were collected via a questionnaire survey and participant interviews. Using the results of the survey, we investigated the changes in attitudes toward and the levels of satisfaction associated with the SP activities in the training program. Based on the results of the interviews, we determined that the subjects had started considering the future. Some responses indicating this were as follows: “the seminar led to a sense of relief regarding future activities as an SP” and “the seminar provided an opportunity to consider seminar management in the future.” The development of communication between SPs was indicated by responses such as “I had more opportunities to hold discussions with other members.” We also noted that the seminar provided opportunities to confront new challenges, according to responses such as “I learned how to handle relationships with new members” and “the seminar provided a good opportunity for stimulation.” In addition, the subjects looked back on their experiences (“the seminar was an opportunity to reflect on my role as an SP” and “the seminar provided an opportunity to objectively perceive instructors”) and derived meaning from these experiences (“I had a real sense of mutual support and mutual learning of SP activities”). In this study, we developed a public participatory SP training program designed to facilitate the mutual growth of SPs and verified its effectiveness.

**Keywords:** Public participatory program, Simulated patient training program

## 1. 緒言

本学看護学部では、「的確な看護実践力を有し、対人関係形成能力を備え、地域貢献できる人材育成」を目的として、開学時より客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination 以下 OSCE) を実施している。さらに授業において模擬患者 (Simulated Patient 以下 SP) の専門科目への積極的な導入による教育を行ってきた。また、SP 養成を大学として行ってきた<sup>1)</sup> が、専門科目への SP の導入依頼数が増加し、新たな SP の養成が急務となってきた。そこで、現在活動している SP (以下、現 SP) と新たに参加を希望する札幌市民 (以下、新メンバー) が共に学習し合うことを意図した新たな市民参画型 SP 養成プログラムを開発することとした。

これまで看護学教育における SP 参加型教育に関する報告は、一部の領域演習<sup>2)</sup> や技術試験において SP を活用した報告<sup>3), 4)</sup> などがある。SP 参加による演習効果は、学生同士のロールプレイに比べて、よりリアリティがあり、教員とは異なる視点からの SP のフィードバックが学生の学修に大きい効果があることが示唆されている<sup>5), 6)</sup>。また、SP のフィードバックによって、教員自身の看護観や教育観を振り返る機会となり、教員の教育力の向上につながっていた<sup>7)</sup>。

市民が模擬患者として教育に参画することは、「学生の役に立つ／自分のためになるという実感」、「模擬患者活動が自己をみつめ新たな自己発見の機会」、「普段の生活では味わえない達成感・爽快感を得る」機会

となっている<sup>8)</sup>。このように模擬患者と協働する大学教育は、地域の人々・学生・教員が共に学び合う場となっている。しかし、大学それぞれにおける SP 養成の実施形態は様々である。一般財団法人ライフ・プランニング・センターにおいては、模擬患者学を導入し、医学生や看護学生の学習効果をあげ、一般の人が医学・看護学に参加することで様々な相乗効果が期待されている<sup>9)</sup>。このようにこれまでは大学や組織が模擬患者の必要性を認識し独自に模擬患者を養成してきた。一方、SP 導入の教育場面を SP の視点から評価している報告<sup>10)</sup> があるものの、模擬患者としての活動経験を有する市民の視点を取り入れた模擬患者養成プログラムの開発の報告は見出せない。以上のような先行研究を参考に今回開発する SP 養成プログラムは、学生のみならず、市民のウェルネスの実現および地域の生涯学習の場の創出につながり、地域の発展に寄与することができると思われる。

本研究では以下の 2 点を主な目的とする。

1. 現 SP の能力を最大限生かす場を設定し、共に成長し合う学習の場を創り出す SP 養成プログラムを開発する。
2. 共に成長し合う学習の場づくりとなり得たかを検証するため、SP のモチベーションや満足感の変化を調査する。

## 2. 研究方法

### 1) 研究デザイン

本研究は、本学看護学部教育運営の一環として実践する SP 養成講座の企画・実施・評価のプロセスを通して、共に成長し合う学習の場を創り出す SP 養成プログラムを開発するアクションリサーチである。アクションリサーチは、実践者が実践をよりよい方向に、改善、向上するのを促すと同時に、個人が変化する過程の一助となることを認め、それを尊重する能動的な研究方法である<sup>12)</sup>。本研究は、現在活動している SP(以下、現 SP)と新メンバーおよび教員が共に作りあげる SP 養成プログラムを開発することから、アクションリサーチを研究デザインとして選択した。

なお、本研究は、現 SP の能力を最大限生かす場を設定し、共に成長し合う学習の場づくりとなり得たかを検証するため、質的研究と量的研究の両方を採用し、方法論的三角法を用いた。

### 2) 対象

(1) 平成 26 年度に活動している現 SP21 名のうち、本研究への協力が得られた 19 名を対象とした。本研究は、現 SP の能力を最大限生かす場を設定し、共に成長し合う学習の場を創り出す SP 養成プログラムを開発することを目的とするため、現 SP を対象とした。

#### (2) 対象の選定方法

平成 26 年 8 月上旬に SP 養成講座の説明と研究の協力依頼を行い、協力の意向のあった現 SP を対象者として選定した。

### 3) 研究期間

平成 26 年 5 月～平成 27 年 3 月

### 4) SP 養成講座のプログラム案の作成と実施

(1) 平成 19～20 年度に本学で実施した SP 養成プログラムの成果を分析し、SP 養成講座案を作成した(表 1)。他大学や SP 自主組織の SP 養成活動の資料を集め SP 養成講座案作成の参考にした。

本模擬患者養成プログラムの開発においては、桜井<sup>11)</sup>の『ボランティアの活動継続に影響を与える要因』を参考に、個人的要因、参加動機要因、状況への態度要因(組織サポート、業務内容、集団性、自己効用感)を理論的根拠として展開した。具体的には、平成 19～20 年度に本学で実施したプログラム

表 1 SP 養成講座のプログラム

開催回数	研修内容
1回目	公開講座 看護教育における模擬患者養成の必要性(講義) 模擬患者参加型授業の紹介(ビデオ)
2回目	本学の教育と模擬患者の役割(講義) 模擬患者の体験談 現SPとの交流
3回目	シナリオに基づく演技とフィードバック(講義)
4回目	シナリオに基づく演技に向けた練習場面の見学
5回目	シナリオに基づく演技の見学
6回目	患者役割のロールプレイ(演技)
7回目	フィードバックのロールプレイ(演技)
8回目	OSCE演技練習とOSCE当日の演技場面の見学
9回目	OSCE演技練習とOSCE当日の演技場面の見学
10回目	現SP合同学習会と修了式 学生を育てるための模擬患者と教員の協働(講義とグループワーク)

(各回に現 SP がサポーターとして参加)

の成果から、SP として必要な演技とフィードバックの技能を習得するための講座を構成した。そのうえで、各講座で求める技能の習得をより促進するために、桜井<sup>11)</sup>の『ボランティアの活動継続に影響を与える要因』に含まれる要素を組み込み、現 SP の能力が最大限に生かされるような SP 養成プログラムを目指し作成した。

(2) SP 養成講座は平成 26 年 9 月から平成 27 年 3 月までの期間で 10 回の研修を実施した。各回のテーマ、学習内容、学習方法、使用教材、場の設定、担当者と役割等の具体的な内容を設定した。

(3) 現 SP と教員の連携を図り、本学の教育運営のスケジュールに沿う形で無理なく組み入れられる内容にした。この際、現 SP のスキルを十分発揮できるよう負担を考慮しつつ役割を分担した。また、現 SP、新メンバー、教員が共に学ぶ場となるような SP 養成講座案とした。

### 5) データの収集方法と調査内容

データは質問紙調査とインタビュー調査により収集した。

(1) SP 養成講座の開講前後に現 SP に質問紙を配布し、質問紙への回答を依頼した。質問紙は、基本属性、模擬患者の活動に参加する動機、活動への思い、活動への満足感についての問から構成した。質問紙調査は、模擬患者の活動に参加する動機については、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「まああてはまる」「非常にあてはまる」の 5 段階で質問した。活動への思

い、活動への満足感については、「非常に満足」「かなり満足」「ある程度満足」「多少満足」「まったく満足していない」の5段階で質問した。なお、質問項目の作成にあたり「ボランティアモチベーションの構造に関する調査」<sup>11)</sup>で使用した尺度を参考にした。なお、著作者より尺度の使用許諾を得た。

(2) SP 養成講座の全講座終了時に、インタビューの同意の得られた現 SP 6 名にインタビューを実施した。所要時間は各 30 分程度であった。インタビューガイドに基づき、SP 養成講座にアドバイザーとして参加したことによる SP としての自分自身の変化や SP 活動に対する気持ちの変化、および SP 養成講座に参画した感想についてインタビューを実施した。

## 6) 分析方法

(1) 模擬患者の活動に参加する動機に関する質問紙調査は、5 段階での質問を「まったくあてはまらない」と「あまりあてはまらない」を「あてはまらない」に、「まああてはまる」と「非常にあてはまる」を「あてはまらない」に集約し、それに「どちらでもない」を加えた 3 段階で、単純集計を行った。また、模擬患者活動への思いと満足感については、質問項目ごとに開始前と終了後の 2 群に分け単純集計を行った後、養成講座前後の変化について、マン・ホイットニーの U 検定により有意差を求めた。

(2) インタビューは、逐語録から「参加者の変化」に関する記述を、前後の文脈を含めて抜き出し意味内容を分析し、類似するデータをまとめてコード化し、類似するコードをまとめて抽象度を上げてサブカテゴリー化し、カテゴリー化した。質的分析についての信用性の確保は 2 点ある。1 点目は、研究参加者(現 SP)の文化を知り、信頼関係を十分な時間を費やして築いてきた研究者からのスーパーバイズを受けた。2 点目は、データをカテゴリー化していく過程において研究者間で審議を行った。

## 7) 倫理的配慮

本研究の実施に際して札幌市立大学倫理委員会の審査を受け承認を得た(通知 No.1415-2)。インタビューの実施にあたっては参加の自由意思、不参加によっても不利益はないことを説明した。インタビュー内容は同意を得て録音し、逐語録を作成した。また、個人情報保護のため、質問紙、インタビューの記録は ID 番号で管理し、個人を特定する情報は記載しないことを説明した。

## 3. 結果

### 1) 基本属性

研究の同意の得られた現 SP19 名中、18 名の回答が得られた(回収率 94.7%)。平均年齢は 67.0±10.9 歳で、60 歳以上が 76.5%を占めていた。男性 6 名(33.3%)、女性は 12 名(66.7%)であった。

### 2) 模擬患者の活動に参加する動機(図 1)

最も多かった参加動機は「模擬患者の活動は価値のある行為だから」15 名(83.3%)と「社会勉強になる経験として」15 名(83.3%)であった。

次いで、「学生の成長への援助をすることで、自分も幸せな気持ちになるから」14 名(77.7%)、「社会への恩返しの意味で」13 名(72.2%)、「私の日常に無い、おもしろい機会を与えてくれる」12 名(72.2%)、「異なる年齢の人たちと一緒にになにかする機会になるから」11 名(61.1%)、「模擬患者の活動はより良い社会を創り出すから」11 名(61.1%)であった。

### 3) SP 活動に対する思いと満足感の変化

「実施前後の SP 活動に対する思いの変化(表 2)」について、「桑の会の一員であるという実感」ならびに「模擬患者の育成に役立っているという実感」のいずれにおいても、実施前後で有意差はみられなかった。また、「実施前後の SP 活動に対する満足感の変化(表 3)」について、「自分の役割の明確さ」には有意差がみられたものの、「大学からの気づかい」「トレーニングや学習の機会」「教員とのコミュニケーション」「手続きや依頼内容のわかりやすさ」「活動自体へのやりがい」「育成に携わる機会」「模擬患者同士の人間関係」「学生や社会に役立っている実感」のいずれにおいても有意差はみられなかった。これらの結果から、本 SP 養成講座プログラムが、現 SP の能力を最大限に生かし、共に成長し合う学習の場を創り出す SP 養成プログラムとなり得たかについて、その有効性を統計学的に示すには至らなかったといえる。しかし、そのうえで SP 活動に対する思いと満足感の変化についての傾向を以下に考察する。

SP 活動に対する思いの変化(表 2)については、「SP の一員であるという実感」と「模擬患者の育成に役立っている実感」は、ある程度思っている会員が多く、養成講座の前後で同様の傾向であった。

SP 活動に対する満足感の変化(表 3)について



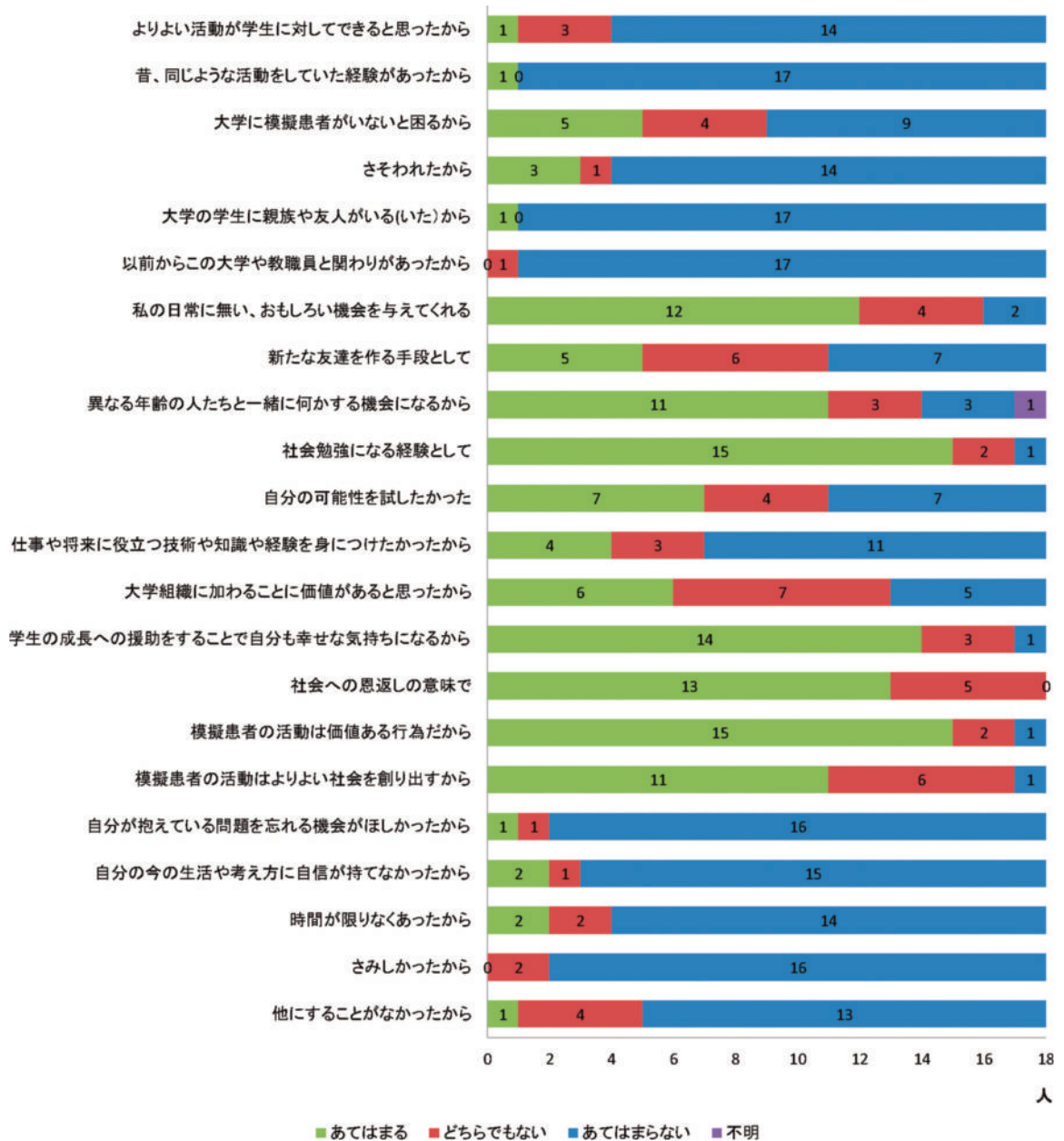


図 1 SP 活動に参加する動機 (N=18)

は、「大学からの気づかい」については、「多少満足している」が終了後になくなり、「非常に満足している」「ある程度満足している」が増える傾向にあった。「トレーニングや学習の機会」については、かなり「満足している」との回答が終了後に増え、「ある程度満足している」が減少している。「教員とのコミュニケーション」については、終了後に「ある程度満足している」が増加した。「自分の役割の明確さ」については、「ある程度満足している」「多少満足している」が終了後に減り、代わりに「非常に満足している」「かなり満足している」が増え、開始前と終了後では有意差( $p=0.038$ )が認められた。「手続きや依頼内容のわかりやすさ」は「多少満足

している」「まったく満足していない」が終了後になくなり、「非常に満足している」「かなり満足している」「ある程度満足している」だけとなった。「活動自体へのやりがい」については、「多少満足している」が終了後になくなり、「かなり満足している」が増加した。

「育成に携わる機会」について、開始前は「多少満足している」が多かったが、終了後は「ある程度満足している」が増加した。「模擬患者同士の人間関係」について、終了後に「多少満足している」「まったく満足していない」がなくなり、「非常に満足している」「かなり満足している」が増加した。「学生や社会に役立っている実感」については、開始前は

表2 実施前後の SP 活動に対する思いの変化

( 開始前 N=18 終了後N=17 )

項 目		非常に思う	かなり思う	ある程度 思う	多少思う	まったく 思わない	$p$ 値 <sup>1)</sup>
		n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	
桑の会の一員であるという実感	開始前	5 (27.8)	5 (27.8)	6 (33.3)	2 (11.1)	0 (0.0)	0.909
	終了後	5 (29.4)	3 (17.6)	8 (47.1)	0 (0.0)	1 (5.9)	
模擬患者の育成に役立っているという実感	開始前	0 (0.0)	2 (11.1)	10 (55.6)	4 (22.2)	2 (11.1)	0.660
	終了後	0 (0.0)	3 (17.6)	9 (52.9)	4 (23.5)	1 (5.9)	

1)Mann-Whitney の U 検定

表3 実施前後の SP 活動に対する満足感の変化

( 開始前 N=18 終了後N=17 )

項 目		非常に満足	かなり満足	ある程度 満足	多少満足	まったく 満足していない	$p$ 値 <sup>1)</sup>
		n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)	
大学からの気づかい	開始前	1 (5.6)	9 (50.0)	7 (38.9)	1 (5.6)	0 (0.0)	0.935
	終了後	3 (17.6)	5 (29.4)	9 (52.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	
トレーニングや学習の機会	開始前	0 (0.0)	6 (33.3)	9 (50.0)	3 (16.7)	0 (0.0)	0.219
	終了後	0 (0.0)	10 (58.8)	5 (29.4)	2 (11.8)	0 (0.0)	
教員とのコミュニケーション	開始前	1 (5.6)	7 (38.9)	7 (38.9)	3 (16.7)	0 (0.0)	0.782
	終了後	1 (5.9)	4 (23.5)	11 (64.7)	1 (5.9)	0 (0.0)	
自分の役割の明確さ	開始前	1 (5.6)	1 (5.6)	12 (66.7)	4 (22.2)	0 (0.0)	0.038*
	終了後	2 (11.8)	6 (35.3)	8 (47.1)	1 (5.9)	0 (0.0)	
手続きや依頼内容のわかりやすさ	開始前	1 (5.6)	6 (33.3)	9 (50.0)	1 (5.6)	1 (5.6)	0.590
	終了後	2 (11.8)	5 (29.4)	10 (58.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
活動自体へのやりがい	開始前	4 (22.2)	6 (33.3)	5 (27.8)	3 (16.7)	0 (0.0)	0.483
	終了後	3 (17.6)	9 (52.9)	5 (29.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	
育成に携わる機会	開始前	3 (17.6)	3 (17.6)	5 (29.4)	6 (35.3)	0 (0.0)	0.865
	終了後	1 (5.9)	3 (17.6)	11 (64.7)	1 (5.9)	1 (5.9)	
模擬患者同士の人間関係	開始前	7 (38.9)	3 (16.6)	6 (33.3)	2 (11.1)	0 (0.0)	0.405
	終了後	8 (47.1)	4 (23.5)	5 (29.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	
学生や社会に役立っている実感	開始前	3 (16.7)	5 (27.8)	6 (33.3)	3 (16.7)	1 (5.6)	0.568
	終了後	2 (11.8)	6 (35.3)	9 (52.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	

1)Mann-Whitney の U 検定

\* :  $p < 0.05$ 

「多少満足している」「まったく満足していない」との回答があったが、終了後はなくなった。代わりに、「ある程度満足している」「かなり満足している」が増加した。

#### 4) SP としての自分自身の変化や SP 活動に対する気持ちの変化(表4、図2)

インタビューへの参加者の年齢は30歳代から70歳代、性別は女性4名・男性2名であった。

プログラムに参加した現 SP の気持ちの変化について質的に分析した結果、189 のコード、37 のサブカテゴリ、10 のカテゴリを抽出した。カテゴリは【 】, サブカテゴリは[ ] にて示す。抽出されたカテゴリ間の関係は図2のとおりである。

現 SP は、SP 養成講座にアドバイザーとして参画することで、[初心を思い出しモチベーションが高まった] [養成講座への参加で気が引き締まった] など【活性化のよい機会となった】[新 SP から刺激を受けた] [新 SP から見られる緊張があった] など【新たなメンバーとの人間関係の調整を学んだ】と新しい活動への挑戦の機会となったことが語られていた。一方で、[無理なくアドバイザーを行うことができた] [自分の SP 経験ややりがいを伝えることができた] など【背伸びせずにアドバイザーを行えた】[新しい仲間が増えてうれしく感じた] など【新 SP とも支え合い学び合える関係になれそうだ】と新しい活動・関係を無理なく乗り越えたことが語られていた。

新しい活動への挑戦の過程では、[会メンバーか

表4 現 SP の養成講座に参画したことによる気持ちの変化

【カテゴリ】	【サブカテゴリ】
活性化のよい機会となった	初心を思い出しモチベーションが高まった
	新SPの姿勢に感心した
	養成講座への参加で気が引き締まった
新たなメンバーとの人間関係の調整を学んだ	新SPから見られる緊張があった
	新SPから刺激を受けた
	アドバイスでは新SPと適切な距離を保った
背伸びせずにアドバイザーを行えた	無理なくアドバイザーを行うことができた
	アドバイザーとして継続可能と感じた
	養成講座にはオブザーバーの姿勢で参加した
	自分のSP経験ややりがいを伝えることができた
	少数の養成人数は負担がなかった
新SPとも支え合い学び合える関係になれそう	新SPとも共に学びあう関係になれそう
	新しい仲間が増えてうれしく感じた
	同じ目的をもった仲間だから安心できた
SP活動の支え合いと学び合いを実感した	会は自分の居場所と感じる
	会では心のつながりを感じる
	会メンバーからのサポートを感じた
	SP活動を通して人に出会えるよさを感じた
	SP活動から多くのことを学んでいる
	実際のSP活動がやる気につながった
	教員との相互作用により満足感が高まった
メンバー同士が話し合う機会が増えた	新SPについて話し合う機会をもった
	演じた後に話し合えるようになった
SPとして省察の機会となった	SPとして参加した時の自分を振り返る機会となった
	SPとしての喜びや苦労を振り返る機会となった
	SPとしての経験・知識を振り返る機会となった
	アドバイザーとしての参加による学びがあった
教員を客観的にみる機会となった	SPと教員の交流の必要を感じた
	教員の間でも違いがあることに気づいた
	教員のことについて話し合う機会をもった
今後の安心感につながった	新たな養成は未来につながると感じた
	人数が増えると体調が崩れた時の安心を感じた
	新たな養成へ期待していた
今後の会の運営について考える機会となった	会の維持には新たな養成の必要を感じた
	会の維持のためには若返りの必要を感じた
	新SPへのサポートの必要を感じた
	SP活動の新たな役割を考える機会となった

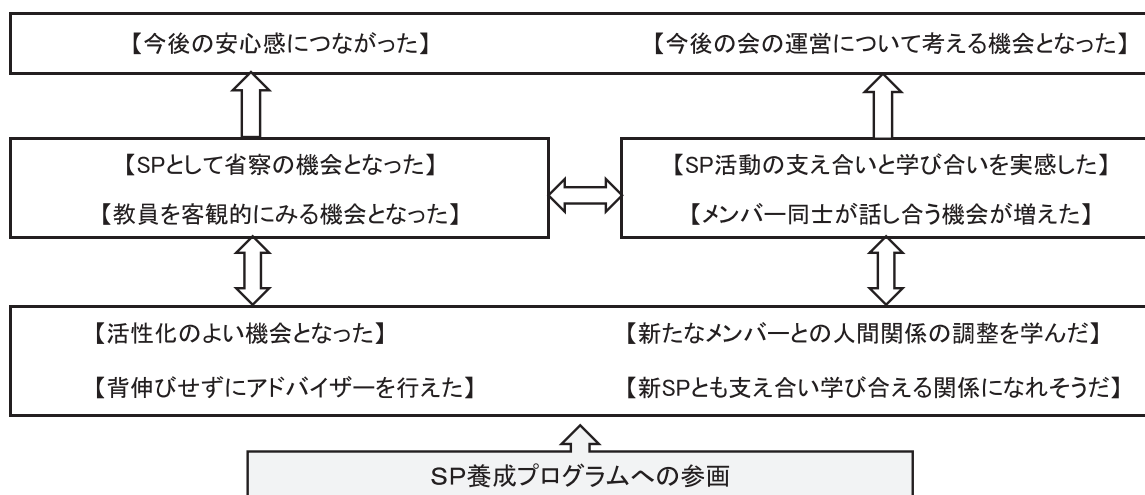


図2 SP 養成講座に参画したことによる SP の気持ちの変化

らのサポートを感じた」[SP 活動を通して人に出会えるよさを感じた]「教員との相互作用により満足感が高まった」など【SP 活動の支え合いと学び合いを実感した】と意味を見出し、[演じた後に話し合えるようになった]「新 SP について話し合う機会をもった」など【メンバー同士が話し合う機会が増えた】と現 SP 同士のつながりに前向きな変化がみられ、新しい活動への支えとしていた。この意味の見出しや支えに立ち返りながら、新たな活動を通じて[SP として参加した時の自分を振り返る機会となった]「SP としての喜びや苦労を振り返る機会となった」など【SP として省察の機会となった】さらに[教員のことについて話し合う機会をもった]「教員の間でも違いがあることに気づいた」など【教員を客観的にみる機会となった】と、模擬患者としての活動を振り返っていた。

現 SP は、SP 養成講座にアドバイザーとして参画するという新しい活動に挑戦し、意味の見出しと支えあいに立ち返りながら、模擬患者の活動を振り返る過程を通じて、[人数が増えると体調が崩れた時に安心できる]など【今後の安心感につながった】「会の発展のためには若返りの必要を感じた」[SP 活動の新たな役割を考える機会となった】など【今後の会の運営について考える機会となった】と、自分たちへの思いが語られていた。

#### 4. 考察

##### 1) 模擬患者活動への参加動機

桜井<sup>13)</sup> は、ボランティアへの参加動機が7つの因子で構成されていることを明らかにしている。それは「自分探し」動機、「利他心」動機、「理念の実

現」動機、「自己成長と技術習得・発揮」動機、「レクリエーション」動機、「社会適応」動機、「テーマや対象への共感」動機の7因子である。回答数が多かった「模擬患者の活動は価値のある行為だから(15名)」「学生の成長への援助をすることで、自分も幸せな気持ちになるから(14名)」「社会への恩返しの意味で(13名)」「模擬患者の活動はより良い社会を創り出すから(11名)」は、いずれも『利他心』動機である。これは、他者のためにボランティア活動を行う意識であり、活動継続をしている場合に強く持っていると考えられる。また、「社会勉強になる経験として(15名)」は、『自己成長と技術習得・発揮』動機であり、ボランティアを通じて何らかの知識や技術を身に付け、それらを発揮したいと望み、参加する意識である。他に「私の日常に無い、おもしろい機会を与えてくれる(12名)」「異なる年齢の人たちと一緒にになにかする機会になるから(11名)」が多かった。これらは『レクリエーション』動機であり、模擬患者としての活動や会の人との交流に楽しさを感じている様子が伺える。これらのことから、SP 活動に参加する動機は、模擬患者に関する知識や技術を習得し、それを学生のために発揮したいという思いと、模擬患者の活動を楽しみながら継続していると考えられる。

現 SP と新メンバーの年齢構成は主に 60 歳代以上であり、仕事の退職後や子育てを終えた時期の社会参加の機会になっていると考えられる。

##### 2) 模擬患者活動に対する気持ちの変化

模擬患者活動への満足感については、「教員とのコミュニケーション」の項目を除いた「トレーニングや学習の機会」「自分の役割の明確さ」「活動自体



へのやりがい」などの項目については、一様に満足感の程度の高い回答が多かった。これらの質問項目は「組織のサポート」「業務内容」「集団性」に対する認知態度として、満足感を測定している<sup>14)</sup>。今回の模擬患者養成講座のプログラム開発にあたり、プログラムに対する現 SP との意見交換の機会を意図的に設け、養成講座にサポーターとして参加してもらった。模擬患者養成講座に SP 自身が参画する機会や現 SP の培ってきた力を発揮できる場を持つことにより、ボランティアとしての満足感が向上することが示唆された。SP 活動の環境を大学として整えながら、現 SP と教員が協働して新たな SP を養成することは、現 SP の活動意欲につながると考える。

一方、模擬患者活動への思いは、「桑の会の一員であるという実感」と「模擬患者の育成に役立っている実感」の2項目で尋ねたが、養成講座の前後で回答数に大きな変化はなかった。今回の養成講座に参画したことにより、SP 活動に対する思いに大きな影響は及ぼさなかったと考える。

### 3) 模擬患者として学びと成長の機会

本養成プログラムは、現 SP と新メンバー(以下新 SP)の直接的な相互作用を意図して開発した。その結果、現 SP にとって、SP 養成講座にアドバイザーとして参画するという新しい活動に挑戦し、意味の見出しと支えあいにより立ち返りながら、模擬患者の活動を振り返る過程を通じて、【今後の安心感につながった】【今後の会の運営について考える機会となった】と、自分たちのことや未来への思いが生じ、語られていた。

今回、量的研究の中で、ボランティアへの参加動機として回答数が多かった項目は「模擬患者の活動は価値のある行為だから(15名)」「学生の成長への援助をすることで、自分も幸せな気持ちになるから(14名)」「社会への恩返しの意味で(13名)」「模擬患者の活動はより良い社会を創り出すから(11名)」であり、いずれも『利他心』動機であった。現 SP は自分たちへの思いよりも、他人の利益を図る態度や考え方をもっていた。松尾は、成長の鍵として「他者のために働くことが自分のためになり、自分のために働くことが他者のためになっている状態を作り出すこと」<sup>15)</sup>とし、自分への思いと他者への思いの相互補完的な関係と融合について述べている。現 SP にとって、SP 養成講座にアドバイザーとして参画するという新しい活動を通じて、利他心

だけでなく、自分たちのことや未来への思いが生じ、語られていたということは、現 SP の成長につながったことが示唆された。

今回、模擬患者活動への思いについて、量的研究では、「桑の会の一員であるという実感」と「模擬患者の育成に役立っている実感」の2項目で尋ねたが、養成講座の前後で回答数に有意差のある変化はなかった。今回の養成講座に参画したことにより、SP 活動に対する思いに大きな影響を及ぼさなかった。一方、質的には、現 SP にとって、SP 養成講座にアドバイザーとして参画するという新しい活動は、【活性化のよい機会となった】【新たなメンバーとの人間関係の調整を学んだ】と挑戦の機会となった一方で、【背伸びせずにアドバイザーを行えた】【新 SP とともに支え合い学び合える関係になれそうだ】と新しい活動・関係を無理なく乗り越えたことが語られていた。全国ボランティア活動実態調査報告書<sup>16)</sup>によると、「現在の活動を続けていきたい」と回答したボランティアは71.2%と多数を占める一方で、「活動の範囲を広げていきたい」という回答は9.6%と少なく、現状維持の傾向があると考えられる。このようなボランティアの意識が報告される中で、現 SP が新たな活動に取り組んだということ、それを大きな負担なく乗り越えることができたということは現 SP の成長の機会となったと考える。

本プログラムは現 SP の養成講座へのサポーターという新たな活動を通じて成長につながったことが示唆された。すなわち市民同士が共に育み合う学習の場づくりとなったと考えられた。本養成プログラムは、市民同士が共に学び合う関係を阻害しなかっただけでなく、成長の機会となったと考えられる。

### 4) 参画型 SP 養成プログラムの今後に向けて

「模擬患者の育成に役立っている実感」は養成講座の前後で変化はなかったが、本養成講座へ携わり方は【背伸びせずにアドバイザーを行えた】と養成のサポーターとしての参画は大きな負担感を感じることなく、無理のない役割であったと考えられる。今回のプログラムは、現 SP が体験してきた内容であり、またサポーターという役割を担っていたことで過度な負担がかからないように配慮した。また、現 SP が今年度担当した大学の授業(演習)や OSCE の練習場面や実際の実践場面の見学を研修として位置づけることで、無理なく現 SP の力

を研修で発揮する形態を取り入れた。今後も新たな SP の養成の必要が生じることを踏まえると、本プログラムを継続的に活用していくことができると考えられる。

SP 活動については【SP 活動を通して支え合いと学び合いを実感した】とやりがいの実感が語られていた。新 SP 養成にアドバイザーの立場で参加することにより、[SP 活動を通して人に出会えるよさを感じた]とこれまでの仲間と取り組んできた SP 活動を振り返る機会にもなったと考える。

本養成プログラムの開発によって、現 SP のやりがいを維持し、市民同士が共に成長しあい、学び合う場となったといえる。今後は、本学において開学当初から実施してきた模擬患者養成講座<sup>17)</sup>に、今回の養成講座のプログラムの内容を取り込み、さらに新 SP の思い、ならびに国内外の SP 養成の動向を参考にしながら、大学における模擬患者養成の在り方を検討していきたいと考える。

## 5. 結論

1) 現 SP のやりがいを維持し、市民同士が共に成長しあい学び合う場として、全 10 回の研修から成る SP 養成プログラムを開発した。

2) SP 活動に対する参加動機について、他者のためという意識と、ボランティアを通じて何らかの知識や技術を身に付け、それらを発揮したいと参加する意識に加え、模擬患者の活動自体を楽しんでいるという動機があった。

3) SP 養成講座へ参加したことによる SP 活動に対する満足感が増加した項目は、「トレーニングや学習の機会」「自分の役割の明確さ」「手続きや依頼内容のわかりやすさ」「活動自体へのやりがい」「模擬患者同士の人間関係」「学生や社会に役立っている実感」で「満足している」であった。一方、SP 養成講座へ参加したことによる模擬患者活動に対する思いの変化では、「SP の一員であるという実感」「模擬患者の育成に役立っている実感」のいずれにおいても大きな変化はみられなかった。

4) SP 養成講座に携わることで現 SP には、【今後の安心感につながった】【今後の会の運営について考える機会となった】といった未来への思いが生じ、【メンバー同士が話し合う機会が増えた】といった会員同士のつながりに変化がみられた。また【新たなメンバーとの人間関係の調整を学んだ】【活性化のよい機会となった】【背伸びせずにアドバイ

ザーを行えた】【新 SP とも支え合い学び合える関係になれそうだ】と新しい役割へ挑戦の機会ともなった。そして、【SP として省察の機会となった】【教員を客観的にみる機会となった】と振り返り、【SP 活動の支え合いと学び合いを実感した】と意味を見出していた。以上より、本プログラムが現 SP の新たな経験から学ぶ力を育て、成長につながったことが示唆された。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました本学模擬患者の皆様、また運営にご協力いただいた本学の中村恵子先生、渡邊由加利先生、守村洋先生、古都昌子先生、神島滋子先生、山本真由美先生、田中広美先生、柏倉大作先生、星幸江先生に深く感謝申し上げます。

なお、本研究は 2014 年度札幌市立大学 COC 共同研究費の助成を得て実施した。

## 文献

- 1) 中村恵子 編著：看護 OSCE：objective structured clinical examination, メジカルフレンド社, 東京, 2011
- 2) 大学和子, 西久保秀子, 土蔵愛子：基礎看護学における客観的臨床能力試験(OSCE)の実践—ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から—, 聖母大学紀要 2：27-34, 2006
- 3) 大久保祐子, 里光やよい, 角田こずえ, 亀田真美, 豊田省子, 野中静：看護実践能力試験の試み—SP への看護体験は成長のチャンス—, 看護教育 45(10)：839-843, 2004
- 4) 浅川和美：全領域での OSCE(客観的臨床能力試験)による技術習得度の評価, 看護展望 31(2)：75-81, 2006
- 5) 清水裕子：看護教育における SP 参加型学習方法の現状と展望, 看護教育 45(10)：824-827, 2004
- 6) 鈴木玲子：SP 参加のコミュニケーション教育の実践から—必要な準備とフォローについて—, 看護教育 45(10)：834-828, 2004
- 7) 豊田省子：看護教員が SP になってわかったこと—私の模擬患者体験—, 看護教育 45(10)：828-833, 2004
- 8) 中村恵子：市民と協働するこれからの大学教育, SCU まちの学校公開講座資料, 2014 年 3 月 24 日
- 9) 第 6 回全国模擬患者学研究大会資料, 一般財団法人ライフ・ケア・プランニングセンター, 2014 年 12 月 13 日
- 10) Lingemann Kerstin, Campbell Teresa, Lingemann Christian, Hölzer Henrike, Breckwoldt Jan: The simulated patient's view on teaching: Results from a think aloud study. Academic Medicine 87(2): 179-184, 2012

- 11) 桜井政成：ボランティアマネジメントー自発的行為の組織化強化 pp.31-59, ミネルヴァ書房, 東京, 2007
- 12) Alison Morton-Cooper((訳：岡本玲子他)：ヘルスケアに活かすアクションリサーチ, 医学書院, 東京, 2005
- 13) 前掲書 11) pp.31-51
- 14) 前掲書 11) pp.51-53
- 15) 松尾睦：職場が生きる人が育つ「経験学習」入門, pp. 132-135, ダイアモンド社, 東京, 2011
- 16) 全国ボランティア・市民活動振興センター：全国ボランティア活動実態調査報告書, pp.153-157, 全国社会福祉協議会, 東京, 2010
- 17) 前掲書 1 ) pp.100-115